
マテリアルゴーストS

オルメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテリアルゴーストS

【Nコード】

N1749P

【作者名】

オルメス

【あらすじ】

マテリアルゴーストの短編集です。都合により一部が原作と異なっておりますが、ご了承ください。

とある日の二人 蛭×鈴音（前書き）

書きたくなったのでつい書いてしまった。後悔はしていない。

とある日の二人 蛍×鈴音

- 蛍 side -

今日は新しいマテリアルゴーストも見つからないので、リビングでのんびり読みかけだった本の続きを読んでいた。すると、絶賛恋人関係中の鈴音が遊びにきたので相手をしていると、急に鈴音が真面目な顔をして言ってきた。

「ねえ、蛍。」

「何？」

「今日は何の日か憶えてる？」

「どうしたの、鈴音？」

「いいから答えて。」

「この前みたいに『蛍に初めてご飯食べてもらってから1ヶ月記念！』とかじゃないよね？」

「そんなんじゃないわよ。一年前にもっと大きなイベントがあったじゃない。」

「あの時だってまるで平安京に都が移った年号を知らない人を見たような顔したくせに…。」

文句をいいつもカレンダーを確認。…ああ、なるほど。そういえばこの時期だったな。

「僕と鈴音が出会ってからもう三年になるのか。」

「や、やだ。蛍ったら。ちゃんと憶えていてくれたのね。」

「…自分から振っておいて何を言っているんだか…。」

「何か言ったかしら？」

「いえ、何も言っておりません。鈴音様。」

「よろしい。」

「あ、プレゼントなら用意してないからな。最近日付なんて気にならないことしかしてなくて…。」

「…今日はそういうことじゃなくて…。」

「？」

…うん。黒い状態の鈴音の対応にも随分慣れてきた。付き合いはじめて当初は鈴音の異常なまでの独占欲に肝を冷やしたものだっただ。

…さすがに地元の幼児相手に公園で遊んでたら殺気を感じたときはどうしようかと思ったよ。確かに女の子だったけどさ。…ところでこういう反応は珍しいな。何かあるんだろうか。

「む、ケイが私以外の女の子について考えている。」

「人の心読むの止めてもらえませんか！？心臓に悪すぎるんですけど！」

「…考えてたのは否定しないのね…。」

「……………」

「…何か言い残すことは？」

「ちよつと待つて鈴音話せば分か」

「せいぜい悔いろ、唐変木！」

「がはっ」

自分の意思とは関係なく吐き出される息、徐々にフェードアウトしていく視界。…鈴音、いつも思うんだけど…。

「そのマテリアルゴーストを一撃で気絶させるパンチ力はどうかと思うよ…。」

そうして僕の視界は完全に閉ざされた。

- 鈴音 side -

「そのマテリアルゴーストを一撃で気絶させるパンチ力はどうかと思うよ…。」

「あ、ちよつと蛭!？」

…またやってしまった。お、女の子として好きな人に自分だけを見てほしい、と思うのは普通の欲求だよね!…蛭に言ったら「鈴音のはそんな可愛いものじゃないから」って言われそうだけど…。

「はあ。今日こそちゃんと言わないと思っていたのに。いややっぱり恥ずかしいしでも言ったら喜んでくれると思うしでもいやだつて言われたらど…ゼエゼエ」

…一人で息切れするまで長い台詞喋って何がしたかったんだろう。

「…ふう。」

深呼吸したら落ち着いてきた。…ここ二週間ほど言う機会を伺っていたけれど、ついにこの日になってしまった。…言う場面を考えただけでも赤面しているのが分かる。…さすがに恥ずかしすぎる。

「高校を卒業したことだし、良かったら私の家に一緒に住まない?」なんて。

改めてそこでノビている蛭の姿を見る。…私はこんなにも悩んでいるのに、何で蛭は寝ているのだろっ、とさっきの行動を完全に棚に上げて、額に滲み出ている脂汗を無視して怒りたくなってくる。

「…ふう。…さっきから深呼吸してばかりよね…。」

今度こそ落ち着いて蛍の顔を見る。

「……。」

思い浮かぶのは蛍と出会ってからの三年間。

「…ねえ、蛍。」

返事はないけど、構わず続ける。元より聞いているとは思っていない。

「まずは、私と出会ってくれてありがとう。蛍と出会って無かったら、私は一生自分の霊能力にコンプレックスを持ったままだったし、この能力は人を守るためにあることを実感出来なかったかもしれない。」

思い浮かべるのは、あの日、繁華街の中で満月を見つめて「死にたい」と呟いていた蛍の姿。つまらないことで私と口論している蛍の姿。大切な先輩のために血相を変えて助けに向かう蛍の姿。初対面の私を全面的に信用してくれた蛍の姿。「次に、私と一緒にいてくれてありがとう。」

一年と半年だけだったけど、蛍と過ごした学園生活。本当に、本当に色んなことがあったけど、蛍はいつもそばにいてくれた。

「最後に、こんな私を好きになってくれてありがとう。」

半年前、零音と名乗るマテリアルゴーストと私たちが闘っていた時、私は姉さんの制止を振り切って（今では反省しています、はい。）

その結果人生最大の危機を迎えた。でもその時に…。

「鈴音、少しだけ話を聞いてくれるかな。こんな、上空からゴム無しバンジーしてる時に言うのも変な話なんだけどさ…。前にユウに言ったことがあるんだよ。自分が死んでも、十日程したらさつさと忘れて、前へ向かおうと決意しちゃう、芯の強い女の子が好きなタイプだって。でもね、鈴音。大切な人のためなら尊敬している姉の制止も聞かずに諸悪の根源に立ち向かつちゃう巫女さんも、僕の好きな、大切な人だよ。」

なんて言ってくれて…。思いが胸から溢れ、思わず声が出る。

「…ねえ、蛍。」

「なんだい、鈴音？」

「うひゃあ！」

- 蛍 side -

「…返事したただけなのに凄い驚かれようだな…。」

「け、蛍！いつから起きてたの！？」

「え？」…さつきから深呼吸してばかりよね…。『のあたりから。』
「ほとんど最初からじゃないのー！」

頭を抱えて叫んでいる鈴音。それに対して僕は構わず声をかける。

「…そんなに恥ずかからなくても…。」

「…え？」

「いや、キョトンとされても困るんだけど。僕は、嬉しかったよ。鈴音がそんなにも僕のことを考えてくれていて。」

…おもしろいくらい顔が真っ赤になってるな、鈴音のやつ。…もつとも確実に他人事じゃないだろうけど。

「あ、あのさ、け、蛭。」

「なに？」

「よ、よ、良かったら、わ、私と、いつ、一緒に住まにゃいきやな？」

緊張しながら、最後噛みまくっているけど、何とか言い切ったその言葉は確かに僕に届いた。

「…お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「じゃ、じゃあ！」

…よし。とても嬉しそうに満面の笑みを浮かべている鈴音を見て僕も一つの決意をする。

「鈴音はっかりに言わせてちゃ不公平だからね。少し僕からもいいかな？」

「ど、どうぞ…。」

「鈴音。僕がこの世界にいるのはもうあまり長くはない。それはいいね？」

「…そのことについては、うん、もう納得してる。」

「その限られた時間で、可能な限り君と伴に過ごし、幸せにすることを誓うよ。これは僕と君との『契約』だ、鈴音。」

「…うん！こっちこそよろしくね、蛭！」

…ユウへの思いが消えたわけじゃないけど。自分で言ったんじゃないか。「複数の唯一無二が増えていく」って。その事を思い出さす

てくれたのは間違いなく鈴音だ。…うん。だから、僕はこう呟く。

「ああ、幸せだ…。」

とある日の二人 蛭×鈴音（後書き）

…どうでしたか？

こんな話を書いて欲しい、がありましたら感想の方へお願いします。
…来たら、嬉しいです。

感想も、もちろんお待ちしています。

名前で呼んで 蛍×紗鳥（前書き）

a k a g iさん、遊兔さんよりリクエストがありました、**蛍×紗鳥**です。中学のころの話です。

名前で呼んで 蛍×紗鳥

- 蛍 side -

「後輩、今週の日曜日は空いているな？そんな後輩に朗報だ。」

「…今度は何ですか、先輩？」

陽慈に頼まれて解決した野球部のいざこざから数ヶ月が経った。あれ以来何故か僕のことを気に入ったらしい先輩・真儀瑠紗鳥とよく分らない交友関係は続いている。

「ここに商店街のくじ引きで当てた、近々オープンする遊園地のプレケットが二枚ある。だが生憎と私にはこの手のことに誘えるような間柄の人間はとも少なくてな。」

「換金しちやえばいいじゃないですか。」

「…可愛げの無い奴だな。こんな美人が誘っているというのに。」

「先輩の場合、綺麗なバラには刺がある、ってレベルじゃないですよ…。食虫植物みたいな感じですかね。」

あるいはラフレシア。…腐った肉の臭いはさすがにしないけど。ってこれもハエ食べるんだった。

「…来ないのならある事無い事色々言い触らすぞ。」

「言い過ぎました。お許してください。」

「嫌だ、許さん。というわけで日曜日、9時に駅前集合だ。」

「はいはい、行けばいいんでしょう。」

「『はい』は 2回で十分だ。」

「その無理数はどう再現すればよろしいんですかね!？」

「はいっ。4 1 4 2 1 3 5 6 2 3…。」

「確かに 2だ！」

「馬鹿言っていないでさっさと帰宅するぞ。何と言ったって私たちは誇り高き帰宅部だからな。」

「そっちから振ってきたんでしようが！あと帰宅部のどこに誇りを感じると!?」

ともあれ行くことになってしまった。

…傘が煩そうだな…。

何て言い訳するかな…。

- 紗鳥 side -

「少し早く来すぎたな…。」

現在の時刻は8時を少し回った頃。つまり集合時間まで一時間近くあるわけだ。…何故こんなにも早く来てしまったのかは自分でもよく分からないのだが、来てしまったものは仕方がない。

「まあ、のんびり待つとしよう。」

今日一日どうやって後輩で遊ぶか、それを考えるだけで何時間でも潰せるな、と思いながら考えることに没頭していった。

一時間後

「すみません、遅くなりました。傘がしつこくて…。」

「なに、もう少し遅く来てくれても良かったんだぞ。そしたら…。」

「そしたら?」

「それを口実に色々と奢らせることが出来た。」

「早くいきましようか。ここから意外とかかりますよね。」

…自然にスルーをしたな、こいつ。…いいだろう。そっちがその気なら、こっちにだって考えがある。真儀瑠紗鳥の真骨頂、とくと味わうがいい！

「せ、先輩！？」

「照れるな照れるな。ただ腕を絡ませただけじゃないか。」

「…まさかこのまま一日を過ごすとか言うんじゃないですよ？」

「良く分かっているじゃないか。私と後輩は以心伝心、相思相愛だな。」

「僕から先輩へは『哀』ですけどね！」

「上手い。後輩、座布団一枚渡したいから買ってきてくれ。」

「何で誉められてるのにパシリさせられるんですか！しかもその座布団遊園地に持っていくんですか！？」

「『遊園地』、『美人探偵』、『座布団』。これだけそろえば何かが起こると思わないか？」

「何も起こってほしくないですし、そもそもあなた探偵じゃないでしょう！後、座布団は明らかに蛇足だ！」

そんなことを話ながら電車に乗り30分。そこから徒歩でしばらく歩くと、ようやく目的地が見えてきた。

「ほう、思ったよりも楽しめそうだな。」

「…どんなアトラクションがあるか調べずに来たんですか？あ、僕には期待しないでくださいよ。」

「ん？一応調べたことは調べたんだがな。如何せん、まだ開いてない遊園地だろ？前評判とか分からなくてな。」

「なるほど。」

「心底どうでもよさそうだな、後輩。」

「人の評価なんて当てにならないでしょう。先輩もよく知っている

でしょう？」

「…確かにな。」

私はそういったのが嫌で学校では猫を被っているわけだしな。

「とにかく。折角空いているのだから、全設備制覇と洒落込もうか！」

「…先輩。さつきから日本語がおかしいですよ。用法はあってますが、洒落込むってなかなか使わないですよね…。」

- 啗side -

「さて、後輩。次はあれに乗ろう。」

「…先輩、もう、無理です…。」

思わずその場に座り込む。疲労はピークに達している。

「何だ。情けないな、後輩。こんな事で疲れているようだったら生きていけないぞ。」

「…さすがに過労死は遠慮願いたいですね。それにもう本当に無理です。だいたい、何でジェットコースター3連発なんてハードスケジュールを消化しないといけないんですか？」

「文句が多いぞ、後輩。あと3つ目はコーヒークップにしたらどう？」

「『この私にかかればコーヒークップですら絶叫マシンと化すことを教えてやろう。』って言うて有言実行したのはあなたでしょう！…大きい声出したら気持ち悪くなってきた…。」

「…仕方ない。少し休むとするか。」

そう言って二人で近くのベンチに座る。ふう、やっと一息つける、

と思ったら、先輩が話始めた。

「…久し振りだったんだ。」

「…？」

「こうやって誰かと気兼ね無くはしゃげる、っていうのが。」

「先輩はいつもそんな感じじゃないですか。」

「これとそれとは、違う。たぶん、嬉しかったんだと思う。後輩と遊園地に来れたのが。」

…この人は本当に嬉しかったのだろう。四歳で弟と離れ、小学六年の時に両親が離婚。それ以来幸せを求めてはいけなと自分を縛り付け、トラウマから何重にも猫を被って生きてきた先輩は。……。

「さて、先輩。次は何に乗りますか？」

「もう大丈夫なのか？」

「…折角楽しいんですから、一秒でも無駄には出来ませんよね？」

口では愚痴ばかり言っていたが、僕だって楽しかったんだ。だから。

「先輩、いきましよう。」「…ああ、そうだな。次はあそこに見える…。」

「また絶叫系ですか！？」「安心しろ。おそらく本日一番の敵だ。」

「その何処に安心する要素があるんですか！だいたい…。」

今は、目一杯楽しもう。先輩のためにも。自分のためにも。

- 紗鳥 side -

「これでだいたい回ったな。」

「そうですね。」

最初に目を付けていた所に全て行き…さすがに全部は無理だったな…そこで時計が間もなく六時を指そうとしていることに初めて気が付いた。…それだけ夢中になっていた、ということらしい。

「では、これで最後でしょう。」

「…やっぱり、あれですか？」

「ああ。定番だろう？」

そう言って私たちは最終目的地である場所・観覧車へと足を向けた。

「遊園地の締め括りは観覧車。雰囲気も出るしな。」

「そうですね。」

この観覧車はこの二大メインの一つらしく（もう一つは豊富な絶叫マシーン。…だからあんなにあった。）地域最大級の大きさ、だそうだ。だから一度乗ってしまうと10分近く拘束される…もっとも、それを苦に思うような人たちが乗ると思えないが。

「このゴンドラを降りたら終わりなわけだが、後輩。今日はどうだった？」

「休日なのに疲れが溜まっただけでしたね。」

「楽しかっただろ？」

「…そりゃあ、そうですね。」

「なら良かったじゃないか。」

「…。」

「…。」

会話が途切れてしまった。：時計の秒針が一回りして、私はおもむろに口を開いた。

「何だが恋人同士みたいだな、私たち。」

「：先輩と付き合う自分の姿が全く想像できませんね。」

「地味に傷つくぞ、それ。」

「いえ、そうじゃなくて。」

「何だ?」「先輩のスペックがあれば僕なんかよりもっといい人見つけられますよ。」

「：もう一回言ってくれないか? テープレコーダーに入れて、からかいのネタにしたい。」

「それを聞いた後に『はい、よろこんで!』って答える人はいないと思いますよ。」

「渋々ならやってくれるのか?」

「やりませんよ!」

「そうか。」

「そうですよ。」

「：。」

「：。」

「：ック。」

「：ックク。」

『アハハハハハハハ。』

思わず吹き出し、落ち着くまで笑い続ける。笑い終えたあと、顔を見合わせ微笑みあう。……。

「なあ、後輩。」

「なんですか、先輩?」

「私がこの空気に当てられたと思って聞いてくれないか?」

「：初めての前振りですね。」

「私はこれでも感謝しているんだ、後輩。人と関わることを恐れていた私を、後輩は変えてくれたと思っている。」

あの日、あの時。この「憎たらしい死にたがり」にあっっていなければ私はどうなっていたらうか？想像するだけ無駄だが、きつとあのまま私はいつか限界を迎えていただろう。…陽慈には足を向けて寝れないな。何故かって？

こんな素晴らしい友人を紹介してくれたんだ。感謝してもしきれないだろう？

「私はお前と対等でありたいと思う。だから、これからは…蛸、と読んで構わないか？」

「…感謝しているのはお互い様なんですけどね。…と、もう降りなきゃいけませんね。…紗鳥。」

「…ああ、蛸。」

この時私は間違いなく幸せだった。「こんな幸せがいつまでも続けばいい」とらしくもなく願ってしまうほどには。

名前で呼んで 蛭×紗鳥（後書き）

：リクエストしていただくと、こんな感じになります。もし、リクエストがありましたら、感想、メッセージどちらでも良いので送ってください。

何もリクエストがなければ次は蛭×深螺にしたいと思います。

感想お待ちしております。

クリスマスですから クリスマス企画（前書き）

今日（25日）の夜になってから突発的に書きたくなり、なんとか書きました。： ノープロットでやった結果詰め込みすぎた気が…。

とりあえず、読んでみてください。

クリスマスですから クリスマス企画

「というわけで式見当。私からのクリスマスプレゼントです。」
「はい？」

気が付いたら、目の前には深螺さんの顔のアップが。服をよく見たら…。

「ゴスロリ…。」

「萌えましたか？」

「…いや、まあ。意外性のある服だな、とは思いましたが。ところでここはいつぞやの共通の夢を見ている…みたいなあれですか？」

「よく覚えてましたね。」

「あれはトップクラス事後処理が面倒でしたからね…。」

思い出すのは色んなものを投げ付けてくるユウの姿。今となってはいい思い出だ。…いい思い出か？

「日頃の感謝を込めて、またやってみました。」

「はあ。で、これがクリスマスプレゼントですか？…確かに、これはすごいですね。」

辺りを見渡してみると一面に広がる星、星、星。まさに天然のイルミネーションといったところか。…霊力による人工的な産物ですが。

「いえ、あくまでこれは舞台です。」

「じゃあ他にも何かあるんですか？」

「私の身体を。」

「…はい？」

今何とおっしゃいましたかこの巫女さんは。…おかしいな。「私の身体を」って聞こえたぞ。

「…すみません。もう一回いつていただいていいですか？」

「私の身体を。…何ですか？こういう台詞を女性の口から言わせたい願望でもお持ちなのですか？」

「無いですけど！…理由は…聞きましたね…。僕には鈴音という彼女がいる身でして。」

「夢だからノーカンです。」

「……。」

「ちなみにプレゼントを受け取ってもらうまでは返すつもりはありません。」

「横暴だ！」

じわじわと迫ってくる深螺さん。まだ服を着ているのが不幸中の幸いか。

「あ。そうですね。確かに服は必要ありませんね。」

考えているそばから服を消さないでください。…え。これ本当にどうしろと？

「…あ。」

「…今度は何ですか。」

「時間切れですね。」

「時間切れ？」

「はい。仕掛けるのが遅くなりすぎました。」

「いや、本当によかったです。そして早く服を着てください。」

「まあ、冗談は置いときまして。」

「冗談だったんですか!？」

「本気の方が嬉しかったですか？」

ぶんぶんぶん、と首を激しく横に振る。

「…そこまで激しく否定されると、さすがの私でも少し傷つくのですが。…本当は直接会って渡すことができないので、その代わりに思ってやったのですが。」

「それはご丁寧にありがとうございます。それがどうしてこんなことに？」

「あなたの顔をみたら思わずやってみたいと思ってしまいました。」

「へ？それって…。」

「では、メリークリスマス。」

そこで目が覚めた。…思い出して顔が赤くなる。…うつ、今日一日は大変なことになりそうだ。

・真儀瑠紗鳥の場合・

「後輩。クリスマスプレゼントだ。」

中を見ると、そこには『魚扁の漢字が書かれた湯飲み』が。

「チョイスおかしくないですか!？」

「他の人と被せたくないと思ったからな。」

「だからってこれはないでしょう!」

「見返りを要求する。」

「はいはい分かってますよ。…えーっと先輩のは…こっちか？」

「ところで後輩。何人にプレゼントを用意したんだ？」

「今手元に残ってるのは二人ですけど郵送しちゃったのは…深螺にサリーにアリス、綾と陽慈と家族分、ですね。」

「…ふーん。女ばかりだな。」

「まあそうですね。はい、先輩。メリークリスマス。」

「これは…もしかしくなくてもプレスレットだな。」

「はい。似合うと思ったので。」

「家宝にする。」

「身につけて利用してくれませんか？」

「…じゃあ後二つ欲しいな。観賞用、保存用、布教用に。」

「三つあっても身につける選択肢は存在しないんですか！？あと頼みますから布教はしないでください。」

「ふむ。まあ、一つで満足しておくか。後輩、ありがとう。」

「どういたしまして。」

「うむ。」

「…。」

「…。」

「あれ？帰らないんですか？」

「後輩。巫女娘との会合は何時からだ？」

「午後6時に待ち合わせしてますけど…。」

「つまりそれまでは後輩をおいしくいただけるということだな。…

待て、何故逃げる？」

「逃げますでしょう、常識的に考えて！」

そこで先輩は急に真面目な顔をして、しばし躊躇したあと、意を決したような顔の変化をした。

「…後輩。」

「何ですか？」

「私は愛人でもいいからな？」

「ブツ。」

思わず盛大に吹き出してしまった。…え？何ですか？今日はそういう日なんですか？…そういう日ですよ。クリスマスですものね！

「…あの、先輩？」

「私は本気だからな。」

「…本気ですか。」

「それで、答えを聞かせてくれないか？」

催促され、落ち着くために一度眼を閉じ、そして考えを整理する。とはいっても、僕の気持ちは今年の夏のあの日から変わっていないわけ。

「ごめんなさい。」

「そうか。」

「…随分とあっさりしてるんですね。フツた僕が言うのもおかしい話ですけど。」

「答えは分かってたしな。これは私なりのけじめみたいなものだ。」

「……。」

「それにな、後輩。そんなお前だから、私は好きになったんだ。」

その告白に僕は思わず固まってしまふ。その言葉にこめられた思いを理解してしまつて。

固まっていたからだろう。僕は全く気が付いていなかった。先輩の顔が近づいてきていることに。

「あ…。」

気付いたときには先輩の顔はすぐそこにあつて。

零になった。

そしてすぐに離れていった。

「本当は舌もいれたいところだったがこれぐらいにしておくよ。」

「…先輩。」

「じゃあな、後輩。巫女娘と仲良くな。」

そのまま出ていこうとする先輩。僕はその姿に何か言つべきか迷ったが、結局こう言うことにした。

「先輩。」

「何だ、後輩？」

「愛用しますね、この湯飲み。」

「ふっ、あたり前だ。この私が選んだのだからな。大事に使つてくれたまえ。」

・届いたプレゼント群の場合・

「これは…深螺とアリスとサリーのか。一まとまりで来たんだ。」

中身は『神無ブランド謹製、厄払いクリスマスケーキ』と『何かの骨』と『猫のパーツ全集』。

「クリスマスケーキはこの際置いとくとして。神無ブランドって何さ？って話だけど。よく送ってくる間に崩れなかつたなって話もあるけど。で、この骨は何？そしてサリーは趣味全開すぎるでしょ。」

「…手紙か。」

『クリスマスケーキは一人で食べないと効果がないので気を付けて

ください。』

『それはトナカイの骨だ。好きに使うといい。』

『鏡花もこれで是非猫好きに！』

「…色々と言いたいことはあるけど、いいか。メリークリスマス、三人とも。」

「次は…綾か。」

中身は『ウサギの書いてある可愛い小物入れ』だった。

「嬉しいんだけど…いつ使えと？こんなの置いてあった日には鈴音に何されるかわかったもんじゃないよね。…手紙は…あった。」

『メリークリスマス。使ってくれたらうれしいかな。』

「…頑張るよ、綾。使うために。メリークリスマス。」

「次は…傘か。」

中身は…『何かの薬』。

「…まさか…これは…。」

『恥ずかしかったけど、鈴音さんのために買ってきました。気を付けなきゃだめだよ、お兄ちゃん。』

「…やっぱりか…。なあ、傘。鈴音との交際を応援してくれるのはいいんだけど…。…まあ、文句は今度会ったときにでも言おう。メ

リークリスマス。」

「そういえば陽慈からは…来ないかもな。またあの娘に振り回されてるんだろうな。…陽慈にも春が来たみたいで良かった良かった。…メリークリスマス。」

・神無鈴音の場合・

「へー。こんなオシャレなフランス料理のお店が近くにあったのね。」
「気に入っていただけたようで何より。じゃあ、メリークリスマス。」
「メリークリスマス。」

キンツ、とグラスが音をたてる。…未成年だから中身はただのノンアルコールカクテルですが。それから二人でフルコースを堪能した。…下見に一度来ているからこれで二度目なのだけど、このお店は本当においしい。そして値段もそれほど高くない。実に素晴らしい。

「プレゼント交換タイム。」
「わー。」

どう見てもバカップルですね、ええ。

「まずは蛸から。」
「はい。」
「…綺麗ね。」

僕から鈴音へのプレゼントはネックレス。…奮発して結構高いの買いました。いやらしい話ですが。

「どうかな？」

「…付けてくれる？」

「かしこまりました、お嬢様。…っと。こんな感じかな。どう？」

鏡を取り出し確認する鈴音。…それにしても…。

「ありがとう、蛍！って蛍？どうしたの？」

「今日の鈴音は一段と可愛いな、と。」
「な。」

「？どうしたの鈴音？」

「…蛍も今日は一段と格好いいわよ。」

「ありがとう、鈴音。さて、次は鈴音の番だよ。」

「私からのプレゼントは…はい。」

「これ…もしかして。」

「頑張ったでしょ。」

鈴音からのプレゼントは『手編みのマフラー』でした。

「うん、頑張ったと思うし嬉しいけど…長くない？」

「蛍ちよつとこつち来て。…ああ、やっぱりいいや。それよりも先に会計すませちゃいませよ。」

「？よく分からないけど、とりあえず会計すませてくるね。」

サッサとお金を払い外に出る。外は12月らしく凍えるような寒さだ。

「で、鈴音。さっきの続きだけど。」

「…このマフラーはね、こう使うのよ。」

と言つて鈴音は自分の首と僕の首にマフラーを巻き始めた。

「…なるほど。」

「ど、どうかな？」

そう尋ねてくる鈴音は肩が触れるほどの距離にいる。

「あつたかいね、これ。鈴音の温かさかな？」

「…えへへー。」

「ちよつと鈴音！？密着しすぎて歩きにくいんだけど。」

「だつて寒いんだもん。」

「…やれやれ。」

「あ！見て、蛭！雪だよ！」

「…今年はホワイトクリスマスか。」

二人で近くにあつたベンチに座りしばらく雪を眺める。

そして、二つの影が一つになった。

「…っはは。」

「…えへへ。」

「あ、そつだ鈴音。この後どうする？」

「こ、この後つて…。」

「いや、そんないい反応されるとは思わなかつただけど。」

「…不束者ですが、よろしくお願いします。」

「その台詞はこの場面でいうことかな！？つて、待つて鈴音！そんな引つ張らないで！く、首がしまるから！」

…この後のことは言いませんが、一つだけ言つておくと、傘のプレ

ゼントが役立ちました。

クリスマスですから クリスマス企画（後書き）

… やっぱり詰め込みすぎでしたかね。 やや反省。

感想、お待ちしております。

カップリング、シチュエーション希望がありましたら、感想におねがいします。

次回こそ蛭×深螺です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1749p/>

マテリアルゴーストS

2010年12月26日11時26分発行